

結草

kusamusubi

No.20

Publishinghouse:2-19-32Moriyama Kanazawa
JodoShinsyu Jhokoji Phone&Fax076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2015.11.01

道を求めて歩む人

道因寺住職 相馬 豊

宗祖親鸞聖人

皆様、こんにちは。今日は本当に秋晴れの爽やかな日曜日ですけれども、各々ご予約があるなか浄光寺さんの本堂にお参りいただきましてどうもありがとうございます。先程、ご紹介いただきました、白山市の道因寺の住職をしております、相馬豊と申します。よろしくお願いたします。

今日は報恩講ということですが、親鸞聖人が亡くなられた後に、親鸞聖人の御命日である11月28日に有縁の方々が一度親鸞聖人にお

念仏のお言葉、あるいはいただき方を確認していく28日講というものが取り結ばれてきます。そして現在

京都の真宗本廟では来月の21日から28日まで報恩講が勤まっています。それに合わせて全国の真宗寺院でも報恩講がお勤めされ、お念仏の教えをいただいた方、あるいはそのお念仏の教えを通して人間として生きる勇氣を得た様々な方がお念仏の教えに出遇うていった。そしてそのことに喜びを表していく、それが報恩講ということの一つの意味合いだと思います。宗祖親鸞聖人を

縁としてもう一度私たちが念仏の教えというものを聞き開いていく。そのことが願われている事柄だと思えます。

今、板書いたしました「宗祖親鸞聖人」という言葉ですけれども、ここに大切なお言葉が二つあります。一つが「宗」という字。そして聖人の「聖」、この二つのお言葉を通してながら今日はお話を進めていきたいと思います。

先ず「宗」という漢字ですけれども、読み方としては「しゅう」と読んだり「むね」と読みます。「むね」と読んだ時は、中心を表わすという言葉遣いになります。そして「宗」という漢字ですけれども、上は「うかんむり」、下は「示」という漢字です。うかんむりですから、何を表しているかと申しますと、家ということ。この「宗」の中の「示」という漢字、これは「祭壇」といわれます。そうすると「宗」という字は「家の祭壇」という意味を持ちます。私たちが生活をしている家の中には祭壇として二つのものが置かれております。一つが神棚です。そ

してもう一つが箱型仏壇。その仏壇を真宗ではお内仏という言い方をします。この二つの祭壇が私たちの生活の場の中に収められているわけですけれども、ではなぜ家の中に神棚があったり、お内仏が置かれたりしているのでしょうか。昔から置いてあったから置かれているのだと言われる方もおられるかもしれませんが、どうして家の中に祭壇が設けられているのでしょうか。

その手がかりということはどこにあるかというと、まずこの「家」という言葉遣いです。家というのは具体的に何を表しているのかというと、世間を表します。世間とは何かと言ったら、人と人との繋がり、係わり。それと同時に世間は常に影響を受けるものがあります。一つが時代からの影響。もう一つが社会からの影響。これらの影響を受けているのが、この世間というかたちです。そうしますと家というのは、家族、家庭と申しますからそこには人がいるわけです。人と人がいる。親子であったり夫婦であったり。そういう関係の中で家というもの

が構成されておりますけれども、その家と言つても365日穏やかに安心していける場であるかといひますと、なかなか難しくなってきたかと思ひます。ちよつとした言葉のはき違ひや、あるいは受け止め方の違ひによつて腹を立てたり、喧嘩をするということが起こつてまいります。それは親子であつても、夫婦であつても、兄弟姉妹であつても、常に喧嘩するという場です。第三者から見れば、「仲の良い証拠や」とかういふふう言われる方もおられますけれども、決して仲がいいわけではないですよ。仲が良ければ喧嘩しない。家の中で喧嘩をするということはお互いに対立し、ぶつかり合うということなんです。そしてその中にあつては、何が問題になるかという、勝ち負けということであつたり、損得ということがあつたり、優劣という問題も含まれています。また家庭というのは、人と人との係わりだけがあるのではなくて、時代や社会の影響も受けております。例えば、先月の国会の中で安全保障に関する保安というものが可決いたしました。

国や国民を守つていくためには必要だと言われる方もおられるでしょう。あるいは若いお母さん方ですと、子供たちを戦争に送りたくない。高校生、大学生にしてみても戦争反対ということを言われます。それが別に良いとか悪いとかいふのではなくて、私たちが社会や時代に影響を受けているということに身を置いているということをお願いいたします。だから皆さんも安全保障に関する法案については、各々のご意見を少なからず持つてはいます。そしてそのことがどこで反映されるかという世間です。その世間がどこで私たち一番身近なところで繋がるのかというところなんです。

その家が、さきほど申しましたように365日穏やかに安心できる場であればいいのですけれども、そのことが突然崩れていく。そういうことが起こつてまいります。もしも家の中に祭壇というものが置かれていなかつたらどういふことになるでしょうか。家の中に神棚やお内仏というものが置かれていなかつたら私たち自身はどんな生活をそこでしていくのでしょうか。一つ見えることは、どこまでも自分の我というものを張りつけて、対立し、そして喧嘩し合う、そういう関係性が広がつていくのではないのでしょうか。自らが敬うべき場を持たなければ、手を合やすことができない生活になつていく。そうすると何かそこに大切なことが失われていくということがあるかと思ひます。

本当に尊い事柄

お内仏の中心は何かと申しますと、ご本尊と呼ばれる中心が置かれています。亡くなられた廣瀬泉さんひろせ しみずという方は、このご本尊という漢字を砕いて読むならばかういふ読み方しかできませんと教えてくださいました。「本当に尊い事柄」と。でもこれだけではまだはつきりしません。何がはつきりしないかといひますと、「私にとつて」といふことです。私にとつて本当に尊い事柄とは一体何でしょうか。こうすると一つはつきりしてくるのではないのでしょうか。皆さんの正面のご本尊、阿弥陀如来に私たちは合掌しているわけですが、その合掌の姿勢を通してご本尊から私たちに何が語りかけられているかといふと、「あなたにとつて本当に尊い事柄は一体何ですか」と。逆にご本尊から私たちへの間いかけの言葉としていただいてみてはいかがでしょうか。あなたにとつて本当に尊い事柄は一体何でしょうか。

皆さん各々に私にとつて尊い事柄はこのことだなといふことは思ひ浮かぶと思ひます。しかし、それが皆同じことだつたら怖いんです。各々に違つていいのです。ただし問題はその思い浮かべたことと、ご自分の生活がどうなつていくかということなんです。例えば命というものが本当に尊いと思われた方は、その命ということと自分の毎日の生活が密着しているかという問題です。命ということを送つていきますかといふことです。あるいは人間という身をいただき、その人間が尊いのだと思われた方は、その人間ということを中心とした家庭生活や職場での勤務時間を過ごし

ていますかということ。思い描くことは誰でも出来るわけです。問題はその思い描いたことと日常の私の在り方がきちんとそこに繋がっていますかということです。

聖の人

実は宗祖親鸞聖人も同じくここに悩まれました。私にとって尊い事柄が一体何なのかと。親鸞聖人にとって本当に尊い事柄を訪ね、聖人のお言葉をいただいでいきますと、二つの言葉遣いから窺い知ることが出来ます。一つは「人間」という漢字から。もう一つは「命」という漢字からです。その文字を親鸞聖人はそれぞれ「ひとどうまるるをいう」。そして「ひとののちみじかくもろし」と受け止められました。命が短く脆いのではないのですね、「人の」という言葉遣いをつけられたということです。そうしますと、その「人間」という言葉遣い、「命」という言葉遣いのところに「人の」という言葉遣いが使われます。人という存在は一体どういう存在なのだろうか。人とは一体どういう意味を持つのだろうか。そのことを親鸞聖人は生涯訪ねて歩まれました。

「宗祖親鸞聖人」という言葉の中の「聖人」の「聖」、これを「聖ひじりの人」と、こう呼びます。親鸞聖人は浄土真宗を開いてくださった方。あるいはお念仏の教えというものをわかりやすく伝えてくださった方。敬うべき方、尊い方というふうには、この「聖人」という字を捉えてしまいがちですけれども、この「聖の人」というのは、道を求めて歩む人という意味です。自分の生涯をかけて一つの中心を求め続けて歩まれた方。その方を私たちは宗祖親鸞聖人と呼びます。

道を求めた中心は何かということ、さきほどの二つの漢字から受け止められる「人」ということです。人という存在はどういう存在で、何を願う、何を求めているんだろうか。そのことを常に思索し、そして行動された方ではないでしょうか。私にとって本当に尊い事柄は何ですかと。その一点をです、常に追い求められていった方、それを「聖の人」と押さえられているのだと思いません。

生涯道を求めていく「聖の人」ということを身近な方が改めて私に教えて下さいました。今年の6月28日、日曜日の午後、今までアパートで生活をされていた4人家族の方が新築の家を建てられました。家族4人が初めて生活を始める日が6月28日です。5月の連休を終えた時点でご主人から連絡を受けました。6月末日には建設中の家が完成いたします。まだ日ははっきりしません、その折に法要を勤めていただけませんか。と連絡をいただきました。どういった法要を勤めるかといいますが、新築の家に箱型仏壇を購入しました。その箱型仏壇だけを家に置いてもそれは仏壇屋さん飾っている商品と同じです。ご本尊を金沢の教務所を通して下附していただきました。その箱型仏壇にご本尊を迎える御移いじり法要というものを執り行ってもらえませんかという連絡をいただいたわけです。

わたった後、リビングで家族の方々とコーヒを飲んでおりました時に私からこういう質問をしました。どうして箱型仏壇を購入し、ご本尊を下附してもらおうと思われたのですかと。新しく家を建てて、そこで家族が生活をしていく。世間一般ではそれで十分なはずなのにどうして箱型仏壇、ご本尊をお迎えして法要を勤めようと思われたのですかと。こういうことをご主人に訪ねました。ご主人といっても年齢は34歳です。奥さんと小学1年生の男の子と幼稚園に通っている女の子と4人家族です。ご主人にお尋ねしたらこう答えられました。

私が結婚を機に実家を出て生活を始める前の晩、亡くなった祖父にこういうことを言われました。家を出てアパート生活を始めるけれども、いずれあなたも家を建てるだろう。もしも家を建てることがあったらこのことだけは大切にしてくれよ。そして言われた言葉がこの言葉でした。「おまえな、お内仏のない家は人間の家ではないからな」と。これが祖父が私にかけてくれた言葉です。

た。その言葉がどうしてもずっと心に残っておりまして。そして家を建てる段階になって、設計図を見たり設計業者と色んな相談をした時に、どうしても箱型仏壇を置くスペースを作って欲しいとこういうことを頼みました。それを聞いていた妻は何でそんなもの置く必要があるんですかと。そういうふうなことを言われて何度も喧嘩をいたしました。でも最終的には自分の意見をそのまま



「境内の大銀杏」撮影坂本茂吉

押し通したそうです。

私たちの家にもそれぞれお内仏が置かれていると思います。そして、その前で手を合わせ生活をしているわけですけども、お内仏があれば人間の家になっているのかとは別問題だと思えます。そうしますとお内仏の中心であるご本尊。そのご本尊と私たち一人ひとりがどういう向き合い方をしているかということが一つ大切な事柄となってくるのだと思います。

ご本尊というのは本当に尊い事柄ということだけではないに、私たちに何を教えてくださっているのかといいますと、方向ということではないでしょうか。方向、これは東西南北の方向ではないわけです。この浄光寺さんの報恩講が終わってお家に帰られる、そういう方向をいうわけではなくて、何の方角かといいますと、人と生まれ生き続けていく方向。その方向がはつきりしないとどういふふうになるかといいますと、方向が定まらないということです。皆さんは今この本堂の絨毯の上に両足を置いて

イスに座っておいでになられる。あるいは、こちらの本堂に来られるまで大地をしつかり踏みしめて歩いてきた。確かに足はあるのです。ところが両足はあったとしても肝心の人として生まれ、生き続けていく方向ということがきちんと言まっていなると迷子になるわけです。自分が今どちらの方向へ向かって歩もうとしているのか分からなくなります。だからこの方角ということが非常に大事になっていくと思います。

その方角ということにつきましても、昨年の一年間で有縁のご門徒さんを見送ってまいりましたが、そのご門徒さんとの係わり合いの中でどうしても忘れることの出来ないお通夜、葬儀ということが一つあります。亡くなったのは53歳のお父さんです。そしてあとに残ったのはお母さんと大学1年生の女の子、そして高校3年生の男の子。この三人の方が残られました。そしてお通夜の折には、家族3人と僅かな親族だけで小さな家族葬としてお通夜、葬儀を執り行いました。そのお通夜のお勤め

とお話を終えて、控室で帰る支度をしておりました折、長女の方が控室に訪ねて来られました、明日お父さんに宛てたお手紙をどうしても読みたいのですけれども、その時間はあまりすかというお尋ねをいただきました。葬儀の前の時間ですからいくらでもありますよと。勤行の前にごぞお父さんに宛てたお手紙を読んであげて下さい。あとは私の方から会館の方や明日司会をされる方に連絡しておきますから大丈夫ですよと、そうやってお通夜の晩は別れました。

そして翌日の葬儀。司会をされる女性の方から、今から長女の方が亡くなったお父さんへのお手紙を読みますと、こういう案内がありました。長女の方が亡くなったお父さんの棺の前に立たれて、お父さんに宛てたお手紙を読まれました。「お父さんの死に会って人間が亡くなっていくということを教わりました。お父さんの死を受けて人として生きていく意味を教わりました。ありがとう」と。わずかこれだけのお手紙を長女の方が声を出して読まれま

した。短なお手紙です。お父さんと
 出合つて18年です。お父さんと娘さ
 ん、人と人としての繋がりは18年。
 その18年の中に色んな出来事があつ
 たと思います。腹を立てて喧嘩をし
 たということもあつたでしょうし、
 あるいはうれしかったこと、色んな
 思い出があると思います。きつとお
 通夜の晩ですね、お父さんに宛てた
 お手紙を控室の方で書かれたと思い
 ます。あれも書きたい、これも書き
 たい。あれも言いたい、これも言
 いたいと、きつといろんな事を思い
 描いたと思います。書いては消した
 り、書いてはクシャクシャにしたり
 して、何度も何度も書き直したと思
 います。そして18年の生涯を凝縮し
 た言葉が「お父さんの死に会つて人
 が亡くなっていくことを教わりまし
 た。お父さんの死を受けて人として
 生きていく意味を教わりました。あ
 りがとう」です。この言葉に18年間
 のお父さんとの出会いや係わりを全
 てまとめたということですよ。

お父さんという存在を亡くしたと
 いうことは辛くて悲しいことです。
 それは私たちも一緒です。身近な人

を亡くしたということは辛くて悲し
 いし、いつまでも記憶の中に留まっ
 ています。忘れることは出来ません。
 しかし、その悲しみや辛さだけで終
 わるのではなくて、そのお父さんと
 の18年間から教えられたことがあり
 ますよと彼女は言っているのです。
 お父さんから私はこのことを教わり
 ましたと。それを具体的に二つの言
 葉で言い表されたわけですよ。一つは
 人は亡くなっていくという事実。二
 つ目は人として生きていく意味をお
 父さんから教わつたと。ここに何
 が明らかになつたかという方向で
 ないでしょうか。悲しみ、辛さを通
 した時、現在大学1年の長女はお父
 さんから、人として生まれ、生き続
 けていく方向をお父さんの死を通し
 て教わりましたと。一人の人の死を
 通して、そこに人として生まれ、生
 き続けていく方向を指し示してくだ
 さつた。ここが非常に大切なことで
 ないでしょうか。

その葬儀でお手伝いをしていただ
 いた僧侶の方がおられたのですけれ
 ども、その方が控室に帰つて来られ
 まして、「今日のお葬式はあの娘さ

んの言葉で十分でしたね」と。お葬
 式というものに長い間携わつてきま
 したけれども、本当のお葬式の意味
 がわかりましたと。その僧侶の方が
 出棺されていく時に長女の側に行つ
 て「今日はありがとうございました」
 と声をかけられました。私たちも数
 多くの方を見送つてここに来てい
 りましたけれども、やはりどこかで
 その大切なことを見落としてきたと
 いうことがあるのではないでしょう
 か。それが昨年の葬儀ということだ
 す。

みちしるべ

もう一度の6月28日に法要をされ
 た家族のところに話を戻しますけれ
 ども、その法要が終わつて、帰ろう
 としておりましたら、ご主人が来月
 もお参りに来てくださいますと
 言われて、私は「えっ！」
 と言つてしまったのです。「はい」
 と言えなくて「えっ！」と言つてし
 まつたのです。なぜ「えっ！」と出
 たかと言いますと、皆さんのお家
 にお寺さんがお参りに来るといふ時
 は、どんな時に来られるでしょうか。

亡くなつた方のご命日にお参りに来
 るということが殆どではないでしょ
 うか。悲しいけれども我が家から亡
 くなつた人が出てしまいました。そ
 の亡き人の命日にお参りに来てくだ
 さい。これが殆どです。ですから私
 の中にも無意識の中にその意識があ
 るわけです。お参りに行くのは亡く
 なつた方のご命日にお参りに行くん
 やという意識です。だから「えっ！」
 とでたわけですよ。この新築の家は今
 日から生活される家族の方はどなた
 も亡くなつていないのです。誰も亡
 くなつていないのにご主人から来月
 もお参りに来てくださいますと
 言われたのです。だから私自身の意識が間
 違つていたのですよ。

それでは来月お参りですけれど
 も、何日にお参りに来ればよろしい
 ですかとお尋ねしました。ご主人が
 来月の15日にお参りしますと言われ
 たのです。15日にお参りに来てくだ
 さいと。ここでまた私自身の中に
 疑問が出てまいりました。15日とい
 う日は一体誰の日なのだろうかと。
 またご主人に聞きました。今15日
 という日をお伺いしたのですけれど

も、この日はどういふふうにも決められたのですかとお尋ねしましたら、ご主人がこう言いました。先程、母親の横に座っていた小学校1年生の長男の誕生日が10月15日です。その15日から取りました。これも驚きです。

そしてまだ注文がありました。毎月15日にお参りをお願いしたいのですけれども、時間は午後7時30分からお願いしますと言われたので

く さ む す び

す。その時間なら残業があつたとしても家に帰ってきております。家族4人が家にいる時間ですと。これで終わりかなと思つたらまた注文がありました。勤行は『正信偈』でお願いしますと言われました。そして、その『正信偈』ということにつきましても、ご主人からこんな言葉が続きました。妻も子供たちも全く『正信偈』は読めません。私もほんの少ししか読むことはできませんが、子供たち二人にどうか『正信偈』の言葉の響きを伝えていただけませんか、と、こうお願いされました。

このことをお願いされた34歳のお父さんにそのことを言わせたのは一

体誰でしょうか。それは亡き祖父です。「おまえな、お内仏のない家は人間の家ではないからな」と。祖父が、家を離れる孫に大事なことを伝えた。それを聞き取つたお孫さんは、働いて家を建て、そして建てるだけで終わることなく祖父の言葉を大事にしてお内仏を設けた。さらにそこで終わるのではなく、その大事なことを中心として家族4人と共に歩んで行きたいと。

そうすると、このお父さんやそのお子さんたちも皆んな聖の人といえるのではないのでしょうか。特別ではないのです。この家族や少女は特別ではないのです。ただ亡き人の言葉に真摯に真向いになって、そのことをきちんと自分の中に受け止めた姿勢です。人として生まれ、生き続ける方向を、ちゃんと亡き方が道標になつてくれたということ。亡き方が後に残る私たちに道標を指し示してくれた。ただの道標ではなく、人として生まれ、生き続けている道標です。中心を大切にしないあなたにとって本当に尊い事柄は何かを生涯かけて訪ねていきなさいと

亡き方が後に残る方々にその生涯をもつて伝えていった。その生涯を通して大切なことを受け止めたお父さんが子供たちに『正信偈』の言葉の響きを伝えていただけませんか。そのことが人間として生きていくという事、そしてその意味を改めて私たちに教えてくれている。

その言葉の中心が「宗祖親鸞聖人」というお言葉ではないでしょうか。宗、中心として聖として歩んでいくという生き方。その生き方に出会つた方々が自分の言葉としてそれを次の世代に伝えていく。一人は「お父さんの死に会つて人間が亡くなつていく」ということを教りました。お父さんの死を受けて人として生きていく意味を教わりました」と。もう一人は、「おまえな、お内仏のない家は人間の家ではないからな」と。この人として生きる方向と生きる姿勢を亡き方がちゃんと後に残る人に伝えていつてくれる。そのことと真向いになつていつた時、私たちは今一番大切な事柄をいつの間にか見失つて迷子になつていたことに気づかさるのではないのでしょうか。そのこ

とをです、ね、お二人のご家族を通してながら昨年、今年と改めて人として生まれ、生き続けていく方向と姿勢を教えていただいた次第です。私自身もいつの間にか迷子になつておつたな、その迷子であるからこそこの一年、一年の節目に出会つてもう一度自分の方向を定めていく、それが報恩講を縁として今日ここに足を運んできたという一番の大きな根本理由ではないでしょうか。案内があつたからこちらへ来たのではなく、自分の生きる方向がわからないからこそ、ここに身を運んできた、これが正直なところではないかといいたいしております。今年もご縁をいただきます！ありがとうございます。

《編集後記》
本文は平成二十七年十月十八日、浄光寺「報恩講」結願日中の法話録であります。
洵まことに勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきました。
私たちは何を宗として、どこへ向かつて歩んでいるのでしょうか。私たちが先立つて生きるというのを確かめくださった「聖の人」のお導きを訪ねていかねばなりません。